

続々「子、親を選べず」その四



今ではお父さんの方が俄然面白いのですが、まだお母さんが家にいた時は、お母さんの方が断然面白かったのです。

それ迄は、お母さんが元気で、冗談ばかりを言い、お父さんはいつも借りてきた猫みたいに小さくなっていました。それも、何となくおどおどしているような借り猫。

「ねえ、なんとか言いなさいよ」といわれても

「・・・」

というのがお決まりの返事でした。

なので、真之介君はいつもお母さんの側にばかりいました。お父さんの側にいってもつまらなかつたからです。

ある時、真之介君はお母さんに

「なんでお父さんとケツコンしたの？」

と訊いてみました。子供心にも少し変に感じたからです。

するとお母さんは

「親が言ったからよ」

といました。

「じいちゃんとおばあちゃんが、言ったの？」

「ばあば」

「じいちゃんじゃなくて？」

「そう。じいじは家来だから、女の作戦会議をして決めたの」

「作戦会議？」

「真ちゃんは未だ知らなくていいの。でも、お父さんには内緒よ。秘密の会議だから、真之介隊員は、機密厳守。ね？」

「うん、分った。隊員だから、ね」

「今日、お父さん仕事で遅いから、ファミレスにご飯食べに行こうか？」

「うん、ハンバーグ頼んでも良い？」

「もち、よ。亭主元気で留守 Bestね」

それが、真之介君が小学校一年の時、その後、小学校五年の時に二人が家をでて、お母さんはマンションに残りました。

六年生になった真之介君は、その時の事を思い出して、お父さんにこの前の質問を又、しました。

「ねえ、おとう、若気の至りで、って、どねえな意味？」

真之介君は、隊員だった事を思い出して、お父さんがケツコンした訳を聞くために、ちょっと嘘を付く事にしました。

秘密事項を話すと、お父さんが傷付く様な気もしたからです。

で、

「疑問はとことん調べえ、おとうが言うたから、訊くね」

「そっか。近頃、成長メキメキや、な」

「わし、学校の勉強はできんけど、こっちの方は、そこそこ、みたいや」

「Good!」

ほな、例、一。

昔な、一目惚れしたん、わし。おかんが新入社員できた時に」

「へえ」

「ところがいくらアタックしてもあかんのよ。おもしろい先輩がおって、その人を好きだったらし。

で、余りにも難攻不落の要塞状態やで、一旦は諦めたん。

わし、完璧おもうないし、無理やな、思うて」

「青春やねえ」

「はっ？何が、青春や。お前、歳、幾つや？」

まっ、よか。

それから三月程してから、唐突に「最近ご無沙汰ね。つまんないヨ」と書類の間に挟んだメモが来たのよ。突如脳天爆発、で、後はボチ状態。腱鞘炎になる位「お手」させられたわ。

だで、頭に血が上って大人でなくなる事を「若気の至り」いうん」

しかし、真之介君は

「それで、大人じゃないかもしれんが若気の方がおもしろうて、ええのちゃう？」
とまづ思い

「おかんの大人の作戦会議の方が、何か怪しい」

と次を感じましたが、口にはしませんでした。

「大人」の勘でした。